

追悼 辻村泰男先生

文部省特殊教育課長，お茶の水女子大学教授，同家政学部などを経て，昭和46年10月から国立特殊教育総合研究所長，特殊教育の整備，充実について研究，行政両面で功績があり，養護学校の義務化に力を尽された。

追 悼

小池 文英

私が初めて辻村さんにお会いしたのは昭和24年で，それ以来30年間御交誼をいただいた。訃報に接し，誠に哀惜の念に耐えない。

辻村さんは昭和10年，東京帝国大学心理学科を卒業しその後，しばらく同大学の航空研究所心理学部研究生となり，13年12月より傷兵保護院技師，15年5月より軍事保護院技師を勤め，20年1月より厚生省勤務となった。

厚生省に移ってまもなく児童局に所属し，養護児童や精神薄弱児の育成に取り組むこととなった。私が辻村さんとお会いしたのはこの児童局においてである。私は恩師・故高木憲次先生の御指示で，昭和24年に厚生省児童局母子衛生課の技官となり，肢体不自由児対策を受け持つこととなった。臨床をやっていた者が突然行政の世界に飛び込んだので，西も東も分らず，とまどうばかりではなはだ心もとなかった。

幸い辻村さんは隣りの養護課（現在の育成課）におり，私と同様に技術系の職員であったので（今でもそうであるが，当時は技術系職員は極めて少数であった），お互いに気心が通じ合い，助言を求めることがしばしばあった。辻村さんはその都度親切にアドバイスをしてくれたので，私としては大助かりで，大変有難かった。

こうした行政上の手続きとか事務的処理といったことの他に，心理学出身の辻村さんからは，児童（障害児を含めて）の心理的・社会的な側面について教わるところが少なくなかった。とりたてて御高説を拝聴した，というようなわけではないが，日常の会話の中から，自然と自分の専門領域（医学）以外の重要な側面について学ぶ結果となったように思う。

辻村さんはその後（昭和27年12月）文部省に初代の特殊教育室長として迎えられ，わが国の特殊教育の基礎造り，その発展のために専念することとなった。

昭和37年4月には特殊教育室が課に昇格し，特殊教育課長となり，その後，お茶の水大学家政学部教授として転出したのであるが，46年10月に国立教育総合研究所が設立されるとともに初代所長に就任し，54年4月1日逝去されるまでその職にあった。

以上のように辻村さんは多年にわたって，わが国の特殊教育の発展のために尽瘁され，その功績は関係者がひとしく高く評価するところである。

昭和44年8月に中央心身障害者対策協議会委員となり，また同年文部省の特殊教育総合研究調査協力者会議議長として，“特殊教育の基本的な施策のあり方”について報告をまとめ，また，特殊教育百年を記念して文部省が刊行した“特殊教育百年史”の編集に当たっては編集委員長としてその重責を果たすなど，わが国の特殊教育の最高リーダーとして数々の業績を挙げられたことは，関係者のすべてが率直に認めるところであり，50年には，わが国の肢体不自由児（者）の療育の領域において顕著な功績があったとして高木賞を受賞している。

辻村さんは温厚な，誰からも敬愛されるお人柄であった。また，考え方が極めて柔軟であり，かつ公正であった。

私が特記したいのは，辻村さんは“リハビリテーション”に対する教育界における最大の理解者，協力者であった，という一事である。

あるいは，私一個人の謬見であるかも知れないが（そうであることを願うのであるが），わが国の特殊教育関係者の中には“リハビリテーション”に対してアレルギー反応を示すむきが少ないように感ぜられる。つまり，障害児の療育には特殊教育だけで足りる，といった固い信念のもとに，他の専門職種を導入してチーム・アプローチの体制を組むことを好まないような傾向が見られるように思うのであるが，辻村さんはリハビリテーションにおける特殊教育の意義と役割りを公正に理解してくれた数少ない1人であった。この点からも，私は辻村さんが特殊教育の最高リーダーであったことに大きな意義を感じるのである。

私事にわたるが，昭和25年に国連のフェローとして辻村さんはカナダに，私は米国に半年間留学した。辻村さんは帰途ニューヨークに寄り，1週間私と同宿した楽しい思い出があるが，辻村さんをニューヨークの空港に送り，手を振って訣別したことが，いまなぜか鮮明に想起されるのである。謹しんで御冥福をお祈り申し上げる。

（整肢療護園園長）